

アイヌ口承文芸テキスト集7
白沢ナベ口述 狼が人間の母親に虐待された

採録・訳・註 中川裕

今回紹介するアイヌ口承文芸のテキストは、1987年12月4日、千歳市蘭越の故白沢ナベ氏の御自宅において、筆者が氏から録音したウエペケレ「散文説話」(整理番号:N8712041.KY)であり、2005年度千葉大学普遍教育科目「アイヌ語4」(中級後期)で教材として使ったものである。

白沢ナベ氏は1905年6月7日(戸籍上は1906年3月15日)、現在の千歳市蘭越(旧ウサクマイ)に生まれ、1993年10月21日に88歳でこの世を去られた。アイヌ口承文芸の伝承者として、またアイヌ語教室の講師として、千歳のみならず全国各地で活躍されるようになったのは70歳を過ぎてからのことだが、その膨大な知識と卓抜な解説能力、そして尽きせぬバイタリティで、アイヌ語を学ぶ多くの人々にとって、理想の教師としてその名を知られるようになった。その功績により1988年には北海道文化財功労者賞を受けている。白沢氏は常々、自分は父親や姉から「アイヌ語を残せ」と言われていたものの、どうやったらそんなことができるものかと思っていたと述べているが、その託された思いは十分に果たして行かれたといえるだろう。我々は白沢氏の遺してくれたものを無駄にすることのないよう、さらに後生に生かす工夫を続けていかなければならない。

あらすじ

ある男が語る。

私は妻とふたりで暮らしていた。妻も私も働き者で、裕福に暮らしていた。いつのころからか、一匹の子犬がやってきて、家の壁によりかかって坐っている。不憫に思った私は家の中に入れ、上座に花藁藪を敷くと、そこにばかり坐っていて、おしっこをする時でも神窓から出入りする。そのうちに大きく成長し、私が狩に行こうとするとついてきて、大きな熊の足跡を見つけると、その足跡を追って行って熊の首を噛み折って倒す。そこへ私は後から追いついて、まずその犬に礼拝し、それから熊のカムイに礼拝し、その熊を解体して山を下りた。そして、おいしいご馳走を犬のために作って、大きな鉢に盛り、お膳に載せて食べさせて暮らしていた。

そのうち、そうやって捕った熊や鹿の毛皮がたくさん貯まったのだが、犬のカムイのことが心配で、和人の村に交易に行くこともできないでいた。だが、ある日ついに決意して、妻にこう言った。

「お前は、私が犬のカムイをどんなに大事に養ってきたか見ていたのだから、ちゃんと世話をしてくれるはずだ。私は和人の村へ毛皮を売りに行って、飛ぶようにして帰ってくるからな」

そして犬のカムイにはこう言った。

「鹿の毛皮、熊の毛皮がたくさんあるのですが、あなたを置いて売りに行くこともできずにおりました。しかし、今日は天候にも恵まれているので毛皮を売りに行ってきます。体に気をつけてお過ごしください」

ここから犬が語る。

そう言い置いて、人間の父は舟に毛皮をどっさり積み込むと、沖へ出て行った。すると、母は六つも弦^{つづ}のついた大きな鍋を下ろしてきて、それを火に掛けると、脂ののった肉や魚のおいしそうなところを鍋いっぱい煮て、煮えたところからむしゃむしゃ食べ始めた。

「このろくでなしのカムイめ。今まで亭主がお前にばかりおいしいところを食べさせていたのだから、これからは私がたらふく食べてやる」

そう言いながら私の前で食べまくり、私には皮や骨ばかりを投げつける。私は腹を立て、頭も尻も隠すようにして体を丸めて寝ていたが、お腹が空いて身がよじれるようであった。だが、「一日で戻ってくる」と言ったのに、いつまで経っても父は戻ってくる様子がない。ふた月経っても三月経っても戻ってこず、私は食事もとらずにいたので、やせ細って足ががくがくし、よろよろよろけて立っているのもできないほどであった。

「こんなふうにして死んでも、悪い母親をほっとさせるだけだ。どうせ死ぬならどこか遠くに行って死のう」と思ったので、私は窓から飛び出して、川伝いに山を下りていった。よろけながら山を下り、地面に倒れて父親を呼ぼうと声を上げると、のどから出てくるものは人間の言葉ではなく、ただ犬の遠吠えばかりである。私は自分に腹を立て、地面を転げまわっていたが、

「こんなことをして死んでも、母親がお前の死骸を見てほっと安心するだけだ」と思ったので、再び立ち上がり山を下りていくと、人間の村が近いらしく、昔木を切った跡があり、最近木を切った跡がある。下りていくと、イチャノロの村に着いた。村にはたくさんの犬がおり、その犬たちが私に向かって吠える声を聞いて、イチャノロの村長が窓から顔を出して私の姿を見た。すると、えらいカムイに相対した時のように、私の前に顔を伏せ、何度も礼拝を重ねてこう言った。

「ペテトクの人が、犬のカムイのおかげで裕福になったということを聞いていたが、そのカムイが何に腹を立ててここまで逃げてきたのでしょうか。二日でも三日でも私のところに休んでいてください」

しかし、ペテトクからさほど遠くないこのイチャノロの村にいても、良いことはないと思ったので、その言葉に耳を貸さず、私はさらに下りて行った。そのうちにまた昔木を切った跡があり、最近木を切った跡がある。下りていくとリピタラの村に着いた。なんとも栄えた村で、村の奥の人たちの家は林の木々と混じり、前の人たちの家は川縁近くまで迫っている。ここでもたくさんの犬がいて、私に吠えかかった。するとリピタラの村長が窓から私の姿を認め、えらいカムイを見るように私の前で顔を伏せ、二度も三度も礼拝をして、自分のところに逗留してくれるようにと言った。そこで私は幣棚

の隅に身を投げ出して丸くなっていた。そこへ六枚の小袖を帯で結び、六枚の小袖を打ちはおって正装した村長が出てきて、山のようなご馳走を私のそばに置き、家に入っていった。

そこで私は自分の家にいたときと同じように、神窓から家の中に入った。家の上座には花莫塵の席がしつらえてあったので、そこで丸くなって寝ていた。すると村長は六つの弦のついた鍋を火にかけて、肉や魚の脂の乗ったところを鍋いっぱいに入れ、煮えたところから大きな鉢いっぱいに入れて、私の脇に置いた。私はまずその汁をなめた。すると生き返るような心地がした。それから具を食べたが、私の父親がよそってくれたと同じようなおいしいところだったので、肝がのびのびして満足した。

それから私はそこに逗留したが、おいしいものばかり食べさせてくれるものだから、普通の力がわいてきた。その家は実はオス犬 20 匹、メス犬 20 匹を飼っている裕福な家だったのだが、村長が狩に行くというので、「メス犬 20 匹、オス犬 20 匹、チュチュチュ」と言いながらでかけると、本当に大勢の犬がその後をついて山に行く。そこで私は窓から飛び出して、その犬たちを追い越して走っていくと、大きな鍋蓋のような熊の足跡がある。それをたどって熊に追いつくと、普通の力を出してその熊の首を折り、離れたところで寝転んでいると、村長が後からやってきた。

「ペテトクの村長がこのカムイのおかげでうわさになっていたはずだ」

と言いながら、まず私に礼拝し、それから熊のカムイに礼拝した。そして、熊のお尻のほうに跳ね、頭のほうに跳ねて解体し、「犬のカムイのおかげで、狩もしないで肉を運ぶだけですむことよ」と言いながら、その熊の肉を背負って山を下りた。家に戻ると、「お疲れでしょうからたらふく食べてください」と言ってお膳をささげてくれた。

そんなふうにして暮らしていると、ある日のこと、表で激しく犬の吠える声がする。見ると、交易に行った私の父が、痩せこけた姿で山から下りてきて、私に言葉をかけ、家に戻るためのご馳走を私のそばに置いた。そしてリピタラの村長にお礼のご馳走を差し出して、こう言った。

「私は和人の村に行きました。すると、頭の上にカラスがとまったような姿の和人が大勢下りてきて、私を舟ごと陸に上げ、毛皮もみんな持ってくれました。私は初めての交易ですので、見知らぬ殿様のところに連れていかれると、殿様はこう言いました。

『交易のために大勢のアイヌ人が来るのに、私のところに来てくれる人はひとりもいなかったのだが、オツテナ殿が来てくれてありがたい』

そういつて、殿様は私の手を引いて座敷に招きいれ、殿様の食べる料理を私の前に並べてくれました。和人の村に行った者は、殿様の言う言葉を聞かないと殺されてしまうと聞いていたので、私は殿様のいうことにひたすらうんうんとうなずいていました。そうやっご馳走を出してくれるのですが、私は犬のカムイのことが心配で、酒を飲まされてもいっこうに酔えず、一刻も早く戻りたいと思っていました。そしてようやくたくさんのみやげ物ももらって家に帰ってみると、犬のカムイの姿がどこにも見当たりません。妻にたずねると、『ご馳走をたくさん食べさせていたのに、ある日窓から飛び

出したきり戻ってきません」と言うではありませんか。私はがっかりして、もう生きている甲斐もないと思い、何も食べずに寝ていると、妻はご馳走を作っては私に背を向けて食べています。

すると、ある日、お前の妻が狼のカムイにつらくあたって、ものも食べさせなかったので、狼のカムイはやせ細って逃げ出し、今はリピタラの村長のところにいる、という夢を見ました。そこで私はよろよろしながらも起き上がって、悪い妻の髪の毛をつかむと、床に叩きつけ梁に打ちつけました。すると妻は本当のことを白状しましたので、私は妻の息の根を止めて、村の外れに捨てました。そして狼のカムイを迎えに山を下りてきたのです」

翌日になると、父は村に戻るために出て行った。そこで、私も後を追って窓から飛び出し、我が家に戻った。父は今まで以上においしいものを私に食べさせてくれ、私も一緒に狩に行くと、以前と同様、大きな熊の首を折って彼の前に置く。父はまず私に礼拝し、それからの熊のカムイに礼拝し、そうやって大事にされて暮らしていた。

私は狼のカムイの息子なのだが、ペテトクの長者がとても行いの良い人で気に入ったので、その子供になるために家によりかかっていたのだ。そして彼に養われ、彼を裕福にしてやって暮らしていたのだが、母親は悪人だったので殺されてしまった。そういうことで、大変な目にあいながら年老いたのだよ。

解説

この話は姉のアサ氏から聞いたものだということである。ここにはアイヌ民族の伝統的な動物観が端的な形で表されているといえる。そのひとつは、人間と犬（後で狼の子とわかる）との関係である。話の中で何べんも出てくるように、それは主人とペットというようなものではなく、親と養子の関係と同じものである。養い親は実の子以上に犬を大事に扱い、そのために妻が恨みを増長させるにいたるほどである。犬のほうは人間の養い親を **a=onaha** 「私の父」、**a=unuhu** 「私の母」と呼び、母親から逃げて力尽きそうになり父親を呼ぼうとする場面では、人間の言葉ではなく、犬の遠吠えが自分の口から出るばかりなのに自分で腹を立て、転げまわってくやしがりたりする。

このように人間の父親が交易に行っている間に、養われているカムイが母親から虐待されて逃げ出すという話は、類例がたくさんあり、仔熊が主人公であることが多い。ごぞんじのように、親熊を捕った際に巣穴で捕らえられた仔熊は村で大事に育て、翌年の冬に熊送り (*iomante*) を行って盛大にカムイの世界に送り返す。カムイから預かった大事な里子であるから、人間が食事をするより先に、一番おいしいところを仔熊にささげて、食べ終わるのを確認してから、自分たちの食事にとりかかったものだといわれる。そして、近づいてきた熊送りにむけて、米やら酒やらを仕入れるために父親が和人の村に交易に行くのだが、その後、不満を溜めていた妻が仔熊を虐待し、耐えかねた仔熊が檻をやぶって逃げ出すという展開になる。同様の話で、夫が子供ばかりかわいがるので不満を持った妻が、

夫の留守の間に自分の実の子を、木のうろに閉じ込めていなくなったことにしてしまう、という話もある。

話の終わりのほうになってはじめてはっきりするが、この主人公の犬は実は狼のカムイの息子であり、心の良い人間の子供になるために遣わされたのだということである。このように狼の子供が犬として人間に飼われるというのも、ウエペケレの中でよく見られる話である。犬は狼が家畜化されたものだと言われており、また実際に狼の子供を飼い育てて猟犬として使ったという事例もあるようである。アイヌの伝承の中でも狼と犬とは密接に関連したものとして描かれているが、一方では、この話のように、狼の血を引いている犬は、他の犬とは一線を画す存在であるという描かれ方もされる。

この話では狼の子はオスであり、子供のいない（しかも妻まで失うことになってしまった）父親とふたり暮らしで生涯をまっとうするような展開になっているが、萱野茂『ウエペケレ集大成』第7話「白狼が人間の妻になった」¹では、ひとり暮らしの男のところに使わされた狼の娘が、やがて人間の姿となってその男と夫婦になる。そして、このような話の例に漏れず、人間世界でいつまでもカムイと人間が夫婦になって暮らしてはおられないということで、先にその狼の娘が早死にし、夫のほうも死んでカムイの世界であらためて夫婦になることになる。

本シリーズ「アイヌ口承文芸テキスト集」2で紹介した「主人を助けられなかった犬」²にも、実は狼であるところの犬が登場するが、この犬は自分の飼い主がチチケウナという悪熊に殺されるのを防げなかったことを悔いて、自ら海に身を投じていわば殉死する。こうした色々な話を見ていくと、他の動物とは違う、人間と犬および狼の特別な関係というものが、クローズアップされてくるであろう。

ところで、この話は形式的に見て特異なところがある。出だしからしばらくの間は人間の男の自叙であり、内容的にも語りの形式においてもまったく散文説話のそれであるが、途中から犬のカムイの自叙に変わり、さらに *sakehe* がついて形式的にも完全に神謡になってしまうという点である。白沢氏はこのようなスタイルをとった語りを別の話でも行っており³、そこでも、出だしは人間が叙述者となって散文説話風に始まるが、途中から *sakehe* がついて神謡のスタイルになっている。

ただし、この話では前半の散文で語られている部分にももともとは別の *sakehe* があって、節をつけて語られていたということである。白沢氏はこう言っている。

「最初は、その犬がおっきくなって山かたるようになったサケへは *tu mik mik tu mik* っていうから

¹ 萱野茂 (1974) 『ウエペケレ集大成』アルドオ: (2005) 新訂復刻『ウエペケレ集大成』財団法人日本伝統文化振興財団: 95-114 第7話貝沢トゥルシノ口述「白狼が人間の妻になった」。

² 千葉大学文学部ユーラシア言語文化論講座編 (2001) 『千葉大学 ユーラシア言語文化論集』第4号: 77-94

³ 白沢ナベ口述 中川裕訳「カッコウの妻になった娘」アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズ7『オイナ (神々の物語) 3』北海道教育委員会: 213-240 (N8710301.KY)。

面倒臭いの。sakehe 言うの面倒臭いから、こんど ikesuy 【逃げ出す】するときから (sakehe をつける)。そこで sakehe 変るんだ。山、生き物 (の) 後、ぼう【追いかける】の、吠えて歩くからその sakehe つけたらしいんだわ。だから tu mik mik tu mik っていうんだ。それいうの面倒臭いものね。なんだかもさくさして」(N8808291.FN)

ということで、あまりその節が好きではないので、前半をわざと散文で語っているのだという説明であった。tu mik mik という sakehe は、mik「犬がワンと吠える」「犬の吠える声」という動詞から構成されているもので、やはり犬(=狼)が主人公となる神謡に見られるものである。萱野茂『炎の馬』掲載の平賀さだも氏の「犬とカワウソ」⁴もそのひとつである。

テキストの表記法について

アイヌ語テキストの表記中、= (イコール) は、その前あるいはその後にあるものが人称接辞であることを示す。_ (アンダーバー) を付したものは、その前の音素が交替して別の音素になっていることを示す。例えば、an w_a → an ma. h_i や y_ak のような例では、h や y が脱落することを示す。...とあるのは、単なるポーズ、言いよどみを表すのではなく、その後で明らかに別の語句に言い直したと思われる場合に付す。その際、*re ... などのように*を添えたものは、単語が言いさしになって、不完全な形で終わっていることを示す。なお、こうした言いさし・言いよどみは、それを示しておかないと、どこまでを言い直しているのか判断がつかなくなるような場合にのみ示してある。OKAGEDE のように大文字にしたところは、日本語の単語がまだアイヌ語化しない段階でそのまま使われていると判断したものを示す。ただし、KONDO「こんどは、そして」のようい、話者を問わずアイヌ語テキスト中に頻繁に出てくるものもあり、アイヌ語化の度合いについて判断の難しいものもある。

今回は韻文部分が多いため、原文テキストとその訳はこれまでの段落ごとの対訳ではなく、各行ごとにつけた。また時として、韻文部分において数行分にわたる詩句を一続きに語ることがある。その場合は便宜上適当なところで行分けしたが、そういった行は2行目以降のアイヌ語テキストを1字下げにして、そのことを示してある。

註は各ページごとに脚註の形で示した。脚註において本編についての解説として載せた白沢氏の言葉は、1988年8月29日に本編の聞き直しを行った際に記録したものである(整理番号N8808291.FN)。なお、脚註にあるN9306021.YRのような記号は私の採録した資料の整理番号であり、N(白沢ナベ)93(1993年)06(6月)21(21日に録音した)1(本目のテープに収録されている)ことを示す。(ピリオド)以下の記号は、YR(ユカラ)、KY(カムイユカラ)、FN(フィールドノート)等を示す。

⁴ 萱野茂(1977)『炎の馬』すずさわ書店:255-261

参照文献略称

『神謡集』: 知里幸恵 (1923) 『アイヌ神謡集』 郷土研究社 : (1978) 岩波文庫

『人間篇』: 知里真志保 (1954) 『分類アイヌ語辞典 人間篇』 日本常民文化研究所 : (1975) 『知里真志保著作集 別巻2』 平凡社

『久保寺辞典稿』: 久保寺逸彦編 (1992) 『アイヌ語・日本語辞典稿』 北海道教育委員会

『千歳方言辞典』: 中川裕 (1995) 『アイヌ語千歳方言辞典』 草風館

『沙流方言辞典』: 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館

本文

a=macihi an.
poro kotan a=ne⁵ wa oka=an w_a
a=macihi an w_a, a=macihi nep enepo
yuptek wa sirki ya ka a=eramuskari. <ri>
toyta kor tu pu epuni re pu epuni.
asinuma ekimne=an kor
kamuy cikoykip yuk cikoykip a=eawnarura.
cise a=esikte.
cise kasma usi soy ta kumakar=an w_a
kuma or a=esikte. osumtapes kor okay.
cep ne yakka poronno a=rayke wa
a=satsatu p ne kusu osumtapes kor okay.
cep ne yakka osumtapes kor okay wa
oka=an pe ne awa,
hentomaniwano pon seta sinep ek wa
cise ekopas a wa patek an
ruwe a=erampokiwen.
"hunak wa ek pe ne wa ene cise ekopas wa
i=konoytanke⁶ kor an ruwe an?"
sekor yaynu=an kusu, <su>
KONDO a=ipere ... a=ipere wa ...
a=ipere akusu, <su>
a=nukarnukar ne
poro seta ne an⁷ kor an hine, <ne>

私には妻がいた。
私たちは大きな村に住んでいて
私には妻がいて、妻はなんと
働き者であるのか、わからぬくらい。
畑仕事をすると、ふたつの倉、みっつの倉を立てる。
私はといえば、山へ行くと
熊や鹿をどんどん獲ってきて
家をいっぱいにする。
家に入りきらないものは、外に掛け竿を立てて
竿をいっぱいにし、そこから油が垂れている。
魚もたくさん捕っては
干すので、そこから油が垂れている。
魚からも油が垂れて
(そんなふうに豊かに) 暮らしていたが
いつのころからか、子犬が一匹やってきて
家によりかかってずっと坐っている
のを不憫に思っていた。
「どこからきて、あのように家によりかかって
私に甘えているのだろう？」
と思ったので、
私にご飯を食べさせ…食べさせて…
ご飯を食べさせると
面倒を見て
大きな犬になっていった

⁵ poro kotan a=ne : 直訳すると「私たちは大きな村である」になってしまいそうだが、こういった表現は白沢氏に限らず見られるものであり、文法的に問題のない言い方のようなのである。

⁶ i=konoytanke : 白沢氏はこの語について、「i=konoytanke したから来たんだべさね。甘えて」と説明している。noy が noynatara 「フラフラになっている」『沙流方言辞典』と関連し、tanke が meritanke 「光っている」『久保寺辞典稿』と関係づけられるとすると、i=「私」ko=「に対して」noy 「フラフラの」tanke 「状態である」、つまり、「力が出なくて私にすがってきている状態である」と解釈できるかもしれない。

⁷ a=nukarnukar ne poro seta ne an : これはまだ後のほうの話だが、先に言ってしまったものと思われる。

KONDO a=ahunke wa	家の中に入れて
ape etok ta okitarunpe so a=kar ⁸ wa,	炉の上座に花莫藎で席を作って
kasi ta a=hotkere akusu,	その上に寝かせると
okitarunpe ka ta patek an.	花莫藎の上にはばかりいる。
okuyma kusu soyne yakka puyar kari ...	おしっこをするのに外へ出るのでも、窓から...
rorun puyar kari ⁹ terke wa soyne.	神窓から飛び出していく。
ahun y_ akka rorun puyar kari terke wa	家に入るときも神窓から飛んで
ahun kane iki kor oka=an akusu,	入ってきて、そうやって暮らしているうち、
tane anakne poro seta ne an hine, <ne>	もはや大きな犬になって
ekimne=an kusu	私が山に行くために...
ekimne tuyun=an ¹⁰ akusu	山に行こうとすると (?)
i=os puyar kari terke hine	私の後を追って窓から飛び出して
i=tura hine kim ta paye=an akusu, <su>	私と一緒に山に行くと
poro iruwe ¹¹ an hine	大きな熊の足跡があつて
SONO iruwe kese anpa wa, <wa>	その足跡を追って
hoyupu ayne irukay ne kor osikoni hine,	走っていくと、すぐに(熊に) 追いついて
poro kamuy okkewe kaye hine	大きな熊の首筋を噛み折って
i=etok omare ¹² wa anu hine,	私の前に置いていった。
orowano a=koonkami. hoski a=koonkami ¹³	そこで私は礼拝した。先に (犬に) 礼拝し
orowa kamuy a=koonkami kane kor	それから熊に礼拝して、
a=tura wa payeka=an.	一緒に(山を) 歩き回った。
asinuma anakne kamuy ne yakka yuk ne yakka	私は熊も鹿も
a=rayke ka somo ki,	捕りもしない。

⁸ ape etok ta okitarunpe so a=kar : もちろん、普通の犬への扱いではない。偉いカムイを迎えた時の待遇で遇しているわけである。

⁹ rorun puyar kari : これもただの犬ではないので、玄関からではなく、自然と神窓から出入りする習慣になっていることを表している。

¹⁰ tuyun : こう聞こえるが、不明

¹¹ iruwe : i- 「その (つまり熊の)」 ru(we) 「足跡 (所属形)」

¹² i=etok omare : etok は「動いているものの前」である。つまり、「私の前」というのはこの場合、「動いている私の前」ということで、噛み殺した熊をその場に置いておくと、そこに後から私が追いついたということを表している。日本語では区別しにくいのが kotca は「静止しているものの前」であり、i=kotca omare wa anu であれば、殺した熊を引きずってきて、私の前に置いたという解釈が可能になる。

¹³ hoski a=koonkami : 「犬に」とは言っていないが、話の流れからして、捕った熊より先に犬に礼拝したのであり、この犬が熊より格上のカムイであることを示している。

a=tukan ka somo ki no ...	(矢を) 射ちもしないで...
a=cotca ka somo ki no ¹⁴ <no>	(矢を) 射当てもしないで
tan ta sike ...	ここで荷物を...
kamuy ne yakka sikehe ¹⁵ a=sanke.	熊もその肉を山から下ろし。
yuk ne yakka sikehe a=sanke wa	鹿もその肉を山から下ろして
a=nukarnukar hi_ne, <ne>	(犬の)面倒を大事に見て
cise ka sikno kam ka racitke(re).	家の中にもいっばいに肉を下げ
cepkyoki=an kor_ cep ka racitke.	魚を捕ると魚も下げて
pirka usike a=supa wa, <wa>	良いところを煮て
poro patci a=konumke wa	大きな鉢を選んで
otcike a=ousi wa a=kopuni ¹⁶ kor e a e a kor	お膳に載せて (犬に) 差し出すと、たらふく食べて
oka=an ruwe ne ayne ...	そうして暮らしているうちに
oka=an ruwe ne ayne, <ne>	暮らしているうち
tane anakne yuk cikoykip kamuy cikoykip	今や、鹿や熊の
kapuhu poronno cise esik kane <ne>	皮がたくさん、家いっばいになるほど
a=satke wa a=kor_ ruwe ne korka,	干して持ってあるのだが
a=kor ... kor kamuy a=epotara wa	我がカムイ(犬のこと) が心配で
a=eyyok kusu, repun ...	(皮を) 売りに船出を...
sisam kotan un repun=an ka eaykap.	和人の村に船出をすることもできないでいた。
a=epotara wa a=kor wa an=an	心配で、(毛皮を) 持ったままできて
a=etoyoni a=ecupyoni ¹⁷ kor an=an.	いたずらに日を過ごし、月を過ごしていた。
"tanto arpa=an kusu ne"	「今日こそ行こう」

¹⁴ a=tukan ka... a=cotca ka ... : 使い分けに多少曖昧なところもあるが、tukan は矢を射ることであり、cotca は矢を射て相手に当てることである。tukan の場合には必ずしも相手に当たったとは限らない。

¹⁵ sikehe : sike 「荷」の所属形。ということは kamuy sikehe 「熊に属するところの荷」つまり「熊の背負ってきた荷物」= 「熊の肉」ということである。

¹⁶ poro patci a=konumke wa otcike a=ousi wa a=kopuni : patci 「鉢」は通常和人から入手した漆器で、宝物のひとつであり、普段犬にえさをやるのに用いたりはしない。それを otcike 「お膳」に載せるなどなおさらである。ここでも、この犬に熊以上の待遇をしていることがわかる。

¹⁷ a=etoyoni a=ecupyoni : 「a=etoyoni っていうのは今日行くか明日行くか、uymam しに行かんばもう、売るものはたくさんあるし、たまっているから、今日行くかな、明日行くかなと思っても、それがその、seta kamuy に置いていったらどういう持ち方されると思ったりすれば行けないでいる。今日行くと思っていけない。明日行くと思っても行けないという話なんだ。それから a=ecupyoni ったら、そう思って日にち、なんぼ日にちも消えてしまって、っていうのはこんど、何ヶ月にもなるわけさ。行くと思っても、行くと思っても、行けないで一ヶ月たった二ヶ月たった」。e- 「〜で」 to 「日」 yoni 「〜を縮める」、e- 「〜で」 cup 「月」 yoni 「〜を縮める」。

sekor yaynu=an h_ikeka
 a=kor kamuy seta <ta> a=epotara wa
 a=hoppa ka niwkes wa <wa>
 a=kor wa an=an ruwe ne korka <ka>
 sineanpeta
 a=macihi a=koytak hawe ene an h_i
 "a=resu pito a=resu kamuy"¹⁸
 ene a=ipere kor ene a=koypuni kor
 a=resu katu e=nukar pe ne kusu
 pirka e=koypuni
 pirka e=ipere ki kus ne na. <na>
 yakne <ne> a=atcikiri a=oyausi
 a=atcikiri a=orepusi sem koraci¹⁹
 terke cipo hopuni cipo an²⁰ yakne <ne>
 sisam kotan un a=kor_ cihoki
 a=euymam kusu ne na."
 sekor kane a=koytak hine
 orowaun a=resu kamuy a=resu pito
 a=koytak hawe ene an h_i.
 "pirka yayeyam e=ki wa e=an kus ne na.
 yuk cihoki kamuy cihoki
 poronno an ruwe ne korka
 a=eyyok kusu a=e=hoppa ka eaykap a kusu
 an=an ruwe ne na.

と思ってみても
 我がカムイなる犬が心配で
 置いていくことができず
 (毛皮を)持ったままいたのだが
 ある日
 私は妻にこう言った。
 「私の養う神、私の養うカムイに
 私がどのように食事をさせ、膳を整えて
 養ってきたか、お前は見ているのだから
 きっと立派に食事を整え
 ちゃんと食べさせてくれることであろう。
 ならば、私は片足を岸に置き
 片足を沖に置くがごとく
 飛ぶように舟を漕いでいって
 和人の村に私の毛皮を
 売りに行ってくるからな」
 と、私は話して
 それから私の養うカムイ、私の養う神に
 こう言った。
 「体に気をつけているのですよ。
 鹿の毛皮、熊の毛皮が
 たくさんあるのですが、
 売りに行くのにあなたを置いていくこともできず
 いたのです。

¹⁸ a=resu pito a=resu kamuy : pito は日本語の「人」と語源的に関係づけられている語だが、意味的にはこのように kamuy との対句で用いられるのが普通で、「人間」という意味で使われることはない。同様の tori ta ku=ne cikap ta ku=ne 「鳥になりたや」などの例を考えれば、これを「神」を表す古い言葉と見る必要はなく、kamuy との対句を作る際の必要上から、二音節の類義語（カミではあまりに kamuy と音が近いということもあっただろう）を取り込んだものと考えられる。

¹⁹ a=atcikiri a=oyausi a=atcikiri a=orepusi sem koraci : 素早く行って帰ってくることを表す表現だという。

²⁰ terke cipo hopuni cipo an : terke cipo hopuni cipo は「跳ねる舟漕ぎ、飛ぶ舟漕ぎ」のように、cipo を名詞として解釈すれば、その後の an は「ある」の意味の自動詞ということになる。そのほうが文法的には問題が少ない。terke cipo のほうに、an が無いことも説明できる。しかし、話の流れからすれば、この an は「私」という意味の人称接辞であると考えたほうが納得がいく。こうした an の使い方は、白沢氏のテキスト中に結構出てくる。

tanto anakne sirpirka hi a=yaykopoye²¹.
 arpa=an y_akne a=eyyok wa ek=an kus ne na.
 pirka yayeyam e=ki wa e=an kus ne na hani."
 sekor kane i=koytakmuye²² hine
 orowaun episne <ne> cip or un
 yuk cihoki kamuy cihoki
 se a se a se a se a se a hine
 cip or esikte.
 cip sanke kor ...
 cip sanke hine esikte hine, <ne>
 repun w_a arpa wa oar isam w_a kusu
 okake wano a=unuhu ene iki hi ene an h_i.
 poro iwan at us su ranke wa
 piskanike cin uyruke²³
 hoka tuyka eterkere²⁴ <re>
 orowa kamuy piye hi²⁵...
 kam piye hi cep piye hi raokuta wa
 su or esikte wa <wa> yanke...
 ci usike yanke wa e a e a e a e a.
 "taan wen kamuy OKAGEDE
 pirka ... pirka aep a=e ka eramuskari.
 cep osatu hi kam osatu hi²⁶ patek

今日は天気がよいのに乗じて
 行って、(毛皮を) 売ってきますからね。
 体に十分気をつけていてくださいよ」
 と、私に言い置いて
 そして浜の舟の中に
 鹿の毛皮、熊の毛皮を
 どんどん運んで
 舟いっぱいにした。
 舟を出すと...
 舟を出して、荷をいっぱい積んで
 沖に出て行ってしまったので
 その後、母がとった行動はこのようなものだった。
 六つも弦のついた大きな鍋を下ろしてきて
 それをまたぐようにして
 炉の火の上に掛けた
 それから熊の肥えたところ
 脂ののった肉、脂ののった魚を放り込んで
 鍋をいっぱいになると
 煮えたはしから取ってむしゃむしゃと食べた。
 「このろくでなしのカムイのおかげで
 おいしいものを食べたことがなかった。
 魚のきれっぱし、肉のきれっぱしばかり

²¹ a=yaykopoye : yay- 「自分」 ko- 「～に対して」あるいは「～と共に」 poye 「～を混ぜる」ということで、N9306021.YR には、cep rup pake a=yaykopoye, cep rup kese a=yaykopoye 「魚の群れの先頭に自分を混ぜ、魚の群れの末尾に自分を混ぜ」という言い方で、魚の群れに混じって泳いでいくという表現がなされている。ここでは、「天気のよいことに混じって」ということから、「それに乗じて」という訳にした。

²² i=koytakmuye : ここで叙述者(物語の中の語り手)が、人間の男から犬へと交代している。一般意アイヌの物語文学は、登場人物の誰かの視点から見た形で展開するが、この話のようにその人物が舞台から姿を消してしまう場合は、当然ながら他の人物に交代しなければならない。その際、『神謡集』中の oyakta terke 「他へ跳ぶ」のように明示的にそれが示される場合もあるが、この話のように、登場人物のせりふを境にして、切り替わってしまう場合も多い。

²³ piskanike cin uyruke : 直訳すれば、「その周りに股を置いた」。鍋があまりに大きいので、持ち上げるのに股を開いてふんばったということを表している。

²⁴ hoka tuyka eterkere : hoka 「炎」 tuyka 「～の上」 e- 「～に」 terke 「跳ねる」 re 「～させる」

²⁵ kamuy piye hi : 次に出てくる kam piye hi を言うつもりだったのだろう。

²⁶ cep osatu hi kam osatu hi : 『人間篇』アイヌ語索引に、「osatuy((ホロベツ))屑。chep ~ 魚のいちばん

a=e kor oka=an ruwe ne.	食べていたんだ。
taan wen kamuy sirun wen kamuy an kusu	このろくでなしの、くされカムイがいるために
wen kamuy patek pirka usike	くされカムイにばかりおいしいところを
a=ere a a=ere a wa,	食べさせて、食べさせて
pirka usi a=e ka eramuskari p ne a kusu,	おいしいところを食べたこともなかったのだから
a=hokuhu oar isam kusu	亭主が行ってしまったからには
poronno a=e kusu ne."	たらふく食べてやる」
sekor hawean kor yanke wa	と言いながら、(鍋から肉を)上げて
i=tukarike ²⁷ ta e a e a,	私の前で食べまくった。
orowa kapuhu ne usi cep ne usi ²⁸	そして、皮のところ、魚のところ(?)
ponehe ne usi i=ka un osurpa korka,	骨のところを私に投げつけるが
iruska kewtum siante kewtum a=yaykorpore.	私は怒り、憤って
hosari pentok hekiru pentok a=yaykoseske ²⁹ .	振り向きもせず
a=osoro ne usi a=sapaha ne usi a=yaykonuyna.	尻も頭も隠すようにして体をまるめて
an=an a korka <ka> tane anakne	いたが、もはや
ipene kamuy ³⁰ i=noye noyne <ne> humas.	お腹がすいて、体がよじれるような思いであった。
a=onaha ka yan ³¹ siri ka oar isam.	父はいつこうに戻ってくる気配がない。
"itto terke ta ³² yan=an kusu ne."	「一日で戻ってきますからね」
sekor itak kor_ repun pe ne a korka	と言いながら出て行ったのに

まずい所(尾びれ)」とある。

²⁷ i=tukarike : tukari 「～の手前」というのは、地名においては、そこから先へ行くと何かがあって進めなくなるような場所を表すのに用いられる。kotca 「～の前」でなく tukari を用いているのは、「私のところまで持って来ずに、その手前で」というニュアンスが入っているのかもしれない。

²⁸ cep ne usi : 訳せば「魚であるところ」だが、これでは意味が通らない。白沢氏のテキストでもここだけに出てくる表現であり、おそらく言い誤りであろうと思われる。

²⁹ hosari pentok hekiru pentok a=yaykoseske : hosari 「振り返る」pentok 「？」hekiru 「振り返る」pentok 「？」yay- 「自分」ko- 「～に対して」seske 「～をふさぐ」ということで、pentok が何を指しているかは不明だが、意味としては「振り向きもしなかった」ということ。同じような表現として hetari pentok hosari pentok a=yaykoseske (N8804043.YR) というのがあり、下を向いたまま顔を上げようとしなかったという意味で使われている。

³⁰ ipene kamuy : 『千歳方言辞典』では「空腹の神」としたが、ipe 「食べ物」ne 「～である」kamuy 「カムイ」という語源からは、「食欲」としたほうがよいかもしれない。このように、自分の意思と無関係に自分の中に起こる感情や感覚を、カムイのもたらすものとする考え方は、アイヌの伝統的な世界観の中によく見られるものである。

³¹ yan : yan は「岸に上がる」ということだが、この場合 repun 「沖に出る＝海の向こうに行く」の反意語であるから、「海の向こうから戻ってくる」という意味になる。

³² itto terke ta : 『千歳方言辞典』では itto を「一晚」と訳しているが、多くの辞書にあるように「一日」のほうがよい。itto の語源について『沙流方言辞典』では「ir-to ひとつながり・日」としている。

yan siri ka isam ruwe ne hine, <ne>
neun pakno otutko rerko ne yan kunak
a=ramu a korka yan siri ka isam.

KONDO tu cup ka yan siri ka isam.

re cup ka yan siri ka isam.

tane anakne sattek=an w_a

ipe ka somo an³³ pe ne kusu

sattek=an w_a a=kokkakuri utasatasa.

a=sittokkuri utasatasa.

as=an yakka omakatetterke=an

tetterke=an kane wa <wa>

as ka eaykap no humas.

"nenno e=an w_a e=ray wa ne yakne

e=wenuhuhu e=koehe³⁴ nankor."

sekor yaynu=an kusu

"neun ka tuymano e=arpa wa

e=ray wa ne yak e=yaykotomka."

sekor yaynu=an kusu

puyar kari terke=an w_a

orowano pet pes san=an

っていうところから今度 sakehe 入れるわ。

<以下、韻文>

sawo: sawo: ae ikesuy=an³⁵ w_a

pet pes san=an

戻ってくる様子もなく、

いつまでたっても、二三日で戻るだろうと

思っていたのに、戻ってくる様子がない。

ふた月たっても戻ってこない。

三月たっても戻ってこない。

今や、私はやせ細って

食事もとらないでいたので、

やせ細って、(歩く) 膝頭ががくがくと交差し

ひじもがくがくと交差するほどになった。

立っていても後によろけ

よろよろして

立っていることもできない気がする。

「こんなふうにしていてお前が死んだならば

お前の悪い母親はほっとするだろう」

と思ったので

「どこか遠くに行って

死んだほうがお前にはふさわしい」

と思ったので

窓から飛び出して

そして川伝いに下りていった。

逃れてきて

川伝いに下った

³³ ipe ka somo an : この an も意味的には人称の=an と解したほうがよいものだが、人称接辞が語という単位につくものだと考えた場合、副助詞の ka を抱合した ipe-ka-somo という自動詞が形成されていることになる。これはアイヌ語の「語」の規定上、議論を要するものである。今のところは、ipekasomo を一語と見るよりは、=an が語よりももっとゆるやかに結合した文法単位につき得ると考えておくことにしたいと思う。

³⁴ e=koehe : ko- 「～に対して」 e- 「～について」 he 「へーと息をする音」 se 「～と言う」。hese は普通「息をする」ことだが、ここでは「ほっと安堵の息を吐く」という意味で使われている。接頭辞 ko- の受けるものは e= 「お前」= 「自分」であり、e- の受けるものは「自分が死んだこと」である。

³⁵ ikesuy=an : ikesuy は、「何かを腹を立てて出て行く」。江戸時代の文書にもイキシユのような形で表記され、「兆散」と訳されて、場所請負人たちの扱いに腹を立てた村人たちがコタンを空にしてどこかへ行ってしまふような事態を指している。

sawo: sawo: ae ki p ne korka	けれども
san=an san=an	下って、下って
keneyotneyot ³⁶	よろよろ
a=ki ki ki kor	しながら
sawo: sawo: ae yayosura=an ³⁷	身を投げ出した。
cis=an kusu	泣こうとして
enune ki kor	そうすると
seta haw a=ki	犬の声が出た。
sawo: sawo: ae a=onaha a=hotuyekar kus ne kor	父を呼ぼうとすると
wose ne a=ki	遠吠えとなる
sawo: sawo: ae wose=an kor	遠吠えしながら
a=yaykoruska ³⁸	私は自分に腹を立てた。
ki p ne kusu	なので
karkarse=an	転げまわって
sawo: sawo: ae hoketuketu ³⁹	足をばたばたさせた
ip a=ki ayne	果てに
nenno e=an w_a	「こんなふうにしていて
e=ray wa ne yak	お前が死んだならば
e=wen-unuhu	お前の悪い母親は
e=ray kapuhu	お前の死骸の皮
e=ray ponehe	お前の死骸の骨を
sawo: sawo: ae nukar ki iki wa	見て
cikoehese	ほっと安堵の息を
i=ekarkar ⁴⁰ _na	つくだろうよ」

³⁶ keneyotneyot : 語源解釈は今のところ不能。白沢氏は「keneyotneyot ったら、こう、のめっていくかのめっていかっていうぐらい、もう弱ってしまっているこというんだもの」と説明している。

³⁷ yayosura=an : yay-「自分」osura「～を投げ捨てる」。空腹で立っている力がなくて倒れたのかと思うと、そうではないらしい。白沢氏はこの部分について「くやしなくてもうばたっと、そこにのめってしまった」と説明している。なぜ、くやしかったのかは次の yaykoruska の註で述べる。

³⁸ a=yaykoruska : 「お父さんて呼ぼうと思って呼ぶのに、ワンコの声出てくるから、自分に腹立っただってということの」というのが白沢氏の説明。それで、くやしくてその場に身を投げ出して、転げまわって足をばたばたさせたという順番で、話が進むのだと考えられる。

³⁹ hoketuketu : ひっくり返って足をばたばたさせること。「山走って走って疲れれば、あの、人間のそばさ来たら、ぼんっとひっくりがえって、こんどやるもんだわ。ワンコは」というのが、白沢氏の説明。

⁴⁰ cikoehese i=ekarkar : 意味上は i=koehese と同じ。ci-動詞／人称接辞（主格・目的格）=ekarkar

sawo: sawo: ae yaynu=an kusu	(と) 思ったので
hopuni=an w_a	立ち上がって
san=an ayne	山を下りていくうちに
sawo: sawo: ae tane anakne	もはや
aynu kotan	人間の村が
hanke noyne	近いらしく
husko ni tuypa ru	昔の木の切り跡が
an ki ki na	あった。
sawo: sawo: ae san=an ayne	山を下りていくと
asir ni tuypa ru	新しい木の切り跡が
an ki ki na	あった。
sawo: sawo: ae "tane anakne	「もはや
kotan hanke ruwe	村が近い
ne nankor_ na"	ようだ」
yaynu=an ki kor	(と) 思いながら
san=an ayne	下りていくと
sawo: sawo: ae a=eramuskari p	知らなかったの
iki korkayki	ではあるが
Ripitar un kur ⁴¹	リピタラの人の
kotankornispa	村長の
kotanuhu	村に
a=osirepa na	私はたどりついたのだった。
sawo: sawo: ae kotan soy ⁴² a=kus	村の前を通過して
san=an ciki	下りていくと
tan ⁴³ inne seta	なんとたくさんの犬が
uekarpa wa	集まって
i=emik hawe	私にほえる声が

という形式で、ひとつの動詞を二行にわたる句に展開するという、韻文の技法。

⁴¹ Ripitar un kur : これは間違いだったらしく、後のほうで Icanor un kur と言い直している。

⁴² kotan soy : soy は「外」だが、kotan soy を「村の外」と訳すと、村を迂回していったように聞こえる。この soy は「家の中」に対する「外」なので、村の家々の外側を通ったということである。ということで「村の前」と訳した。

⁴³ tan : tan は「この」だが、このように目の前にあるものに対する一種の強調を表す用法で使われることも多い。

royse kane	かまびすしく
sawo: sawo: ae kotan kor kur	村長
Ripitar un kur kotankonnispa	リピタラの村長が
seta mik an ⁴⁴ hawe	犬のほえる声を
nu p ne kusu	聞いたので
oyamokte wa	不審に思って
puyar kari inkar ki na	窓から見た。
sawo: sawo: ae kotan kor_ nispa	村長は
nep kamuye kosikepuni p	何のカムイを目にしたというのか
i=tukarike	私の前に
kosikerana	視線を
ranke kane	落とし
sawo: sawo: ae tuno iwan_ suy	二度も
reno iwan suy	三度も
sawo: sawo: ae enuki ayne	(礼拝を) した上で
raciwrikikur	顔を
punpa kane	上げて
otu sanaske	二度も
ore sanaske	三度も
arukakuste	手を上げて
sawo: sawo: ae i=koonkami	私を礼拝して
ene oka hi	こう言った。
sawo: sawo: ae "Petetok un kur" ⁴⁵	「ペテトクの人が
epirka hawe	それで豊かになったことを
a=nu a kamuy ⁴⁶	聞いていたカムイが
nep ruska wa	何に腹を立てて

⁴⁴ an : この an は seta mik を主語とする「ある」だととれるが、seta mik hawe で文法的に成立する上に韻律的にも不要であり、なぜこのような表現がとられたか不明。

⁴⁵ Petetok un kur : この主人公の犬(狼)の飼い主のこと。Petetok は「川の源」という意味だが、ここでは地名として固有名詞的に使われていると考えてもよい。

⁴⁶ Petetok un kur epirka hawe a=nu a kamuy : これは nu の目的語である名詞句 (hawe 「声」をヘッドとする) 中の動詞 epirka 「～で豊かになる」の目的語である kamuy を取り出して、nu を含む関係文のヘッドにした、きわめて複雑な構成を持つ表現である。このテキストを使った授業中、Anna Bugaeva 氏は、この表現が言語類型論的に見てかなりまれな形の関係節を作っていることを指摘した。

ikesuy ki ya?	逃げてきたというのか。
sawo: sawo: ae i=kosini yan	私のところで休んでください
i=korewsi yan.	私のところに御逗留ください。
tutko rerko "	二三日
itak ki ki kor	(と) 言いながら
tu onakmi toy	ふたつの礼拝を
arukakuste	繰り返した
ki p ne korka,	のだが
"hankeno e=an ⁴⁷ w_a	(悪い母親の) 近くにおいて
ne wa ne hike	も
nep rakaha ne	何の甲斐がある
nankor y_a."	だろう」
yaynu=an kusu	(と) 思ったので
pet pes san=an.	(また) 川伝いに山を下りた。
sawo: sawo: ae Icanor un kur ⁴⁸	イチャノロの人の
kotan kotankornispa	村長の
ye a itak	言った言葉を
a=kasi ki wa	私は無視して
pet pes san=an	川伝いに下った。
enu ki ayne	そのうちに
sawo: sawo: ae husko ni tuypa ru an	昔の木の切り跡がある。
asir_ni tuypa ru an	新しい木の切り跡がある。
san=an ayne	下りていくうちに
sawo: sawo: ae Ripitar ⁴⁹ un kur	リピタラの人の
kotankonnispa	村長の
soyke a=kus	(家の) 前を私は通った。
nepenepo	なんとまあ

⁴⁷ hankeno e=an : hankeno 「近くに」というのは、無論、自分を虐待した母親の近くにとということ
で、まだ Petotok から遠く離れきっていないこの村では、ということである。

⁴⁸ Icanor un kur : 村の名前を Ripitar と言っていたはずだが、ここでは Icanor になっている。この
点について白沢氏に確認したところ、最初に着くのが Icanor で、そこを通り越して Ripitar に行く
のだということ、ここでは Icanor が正しいようである。ican 「サケ・マスの産卵穴」 or 「のど
ろ」の意。

⁴⁹ Ripitar : ri 「高い」 pitar 「河原」の意。

utari inne	一族が多い
ki p ne kusu	ものだから
mak un utari	奥の人たちは
cinitaykopoye ⁵⁰	林と混じり
sanke utari	前の人たちは
cipetkosanke ⁵¹	川のところまで出てきている。
sawo: sawo: ae ki p ne kusu	それなので
tan inne seta	たくさんの犬が
i=ka cikuste	私に襲いかかり
a=i=emik hawe	私にほえる声が
royse kane	かまびすしい。
sawo: sawo: ae ki akusu	すると
kotankonnispa	村長が
puyar kari i=hotanukar	窓からこちらをうかがった
enuki ki na	のだ。
sawo: sawo: ae tu onkami toy	ふたつの礼拝
DENAI nep kamuye	ではない。何のカムイを
kosikepuni p	見るというのか
i=tukarike	私の前に
kosikerana	視線を低く
ranke kane	落として
sawo: sawo: ae tuno iwan suy	二度も
reno iwan suy	三度も
ki a korka	(礼拝を) したが
raciwrikikur	顔を
punpa kane	上げて
sawo: sawo: ae tu onkami toy	二度の礼拝を
arukakuste	重ね
kurkasike	ながら

⁵⁰ cinitaykopoye : ci-再帰 nitay 「林」 ko- 「～に対して」 poye 「～を混ぜる」 = 「自らを林に混ぜる」 = 「林に混じる」

⁵¹ cipetkosanke : ci-再帰 pet 「川」 ko- 「～に対して」 sanke 「～を出す」 = 「自らを川に向かって出す」 = 「川縁まで出る」。

itak omare.	こう言った。
sawo: sawo: ae "Petetok un kur kotankonnispa epirka hawe a=nu a kamuy nep ruska wa ikesuy ki ya	ペテトクの人の 村長が それで豊かになったと 聞いていたカムイが 何に腹を立てて 逃げてきたのか
sawo: sawo: ae i=kore ... otutko rerko i=korewsi yan i=kotori yan."	二三日 私のところに泊まってください。 私のところに逗留してください」
sawo: sawo: ae itak ki ki kor heetaye na.	(と) 言いながら (窓から) 頭を引っ込めた。
sawo: sawo: ae Icanor un kur ka ... Icanor un kotankornispa ye a itak a=kasi wa san=an awa Ripitar un kur ye itak ka a=kasi ki wa ne wa ne ciki, nep rakaha oma nankor y_a?" yaynu=an kusu hosipi=an w_a	イチャノロの村長の 言った言葉を見捨て山をおりたが リピタラの人の言う言葉も 無視した ならば 何の甲斐が あるだろうか」 (と) 思ったので 戻って
sawo: sawo: ae Ripitar un kur oro inawcipa kes ta ⁵² yayosura=an siukokarkari enuki ki wa an=an awa	リピタラの人の 幣棚の隅に 身を投げ出して まるくなって そうして いたところ
sawo: sawo: ae iwan kosonte ukoekutkor	六枚の小袖を 帯で結び

⁵² oro inawcipa kes ta : この oro の文法的な役割がいまひとつ不明だが、Ripitar un kur oro ta / inawcipa kes ta 「リピタラの人のところに / (その) 幣棚の隅に」というような表現をひとまとめに表そうとしたものではないか。

iwan kosonte	六枚の小袖を
opanere wa	うちはおって
sawo: sawo: ae iwan sisak pe ⁵³	六つのご馳走を
ukoani wa	ひと抱えにして
soyne hine	表に出てきて
i=sam ta arki	私のそばにやってきた。
sawo: sawo: ae "e=rewsi ipe	「お泊りのお食事を
a=sanke siri	お出し
ne hi tapan na.	いたしますよ。
hosipi ki wa	戻ってきて
tutko rerko i=kosini yan	二三日私のところで休んでください
i=korewsi yan."	私のところに泊まってください」
sawo: sawo: ae itak ki ki kor	(と) 言いながら
iwan sisak pe	六つのご馳走を
i=sam omare	私のそばに置いた。
tu onkami toy	ふたつの礼拝を
arukakuste	重ね
re onkami toy	みつつの礼拝を
arukakuste	重ねた。
orowakayki	そして
ahun ki ki na.	家の中に入っていった。
sawo: sawo: ae tapanpe kusu	そこで
a=uni ta an=an hi neno	私は自分の家にいたときと同じように
rorun puyar a=kari	神窓を通して
terke=an w_a	跳んで
ahun=an awa	家の中に入ってみると
sawo: sawo: ae ape etok ta	上座に
okitarunpe	花莫塵の
soho an na	席がしつらえてあったので、
sawo: sawo: ae kasi ta yayosura=an	その上に横になって

⁵³ sisak pe : sisak は「珍しい」「類まれな」という意味の連体詞だが、sisak pe のように使われた場合には「めったにないようなご馳走」という意味になることが多いようである。

sapaun=an kuni	頭を体につっこむようにして
osor'un=an kuni ⁵⁴	お尻を体につっこむようにして
a=yaykoseske	体を丸めて
sawo: sawo: ae hemuymuye=an ⁵⁵	不貞寝を
an=an awa	していたところ
kotankonnispa	村長が
iwan at us su	六つの弦のついた鍋を
ranke ki wa	下ろして
hoka tuyka eterkere na.	炉の上に掛けた。
sawo: sawo: ae orowakayki	そして
kam piye hi	肉の脂ののったところ
cep piye hi	魚の脂ののったところを
raokuta.	どっさり入れた。
su or esikte	鍋いっぱい
enuki ki na	そのようにした。
sawo: sawo: ae su noski punaspunas ⁵⁶	鍋の中央が沸き立った。
enuki awa	すると
ci usi wano	煮えたところから
yanke ki wa	上げて
poro patci	大きな鉢
sikteno rur_ turano	いっぱい、汁と一緒に
omare ki wa	入れて
i=sam omare.	私の脇に置いた。
sawo: sawo: ae tapan pe kusu	
<su> hopuni=an w_a	起き上がって
rurihi wano	その汁から
a=kemkem ⁵⁷ ki na.	なめた。

⁵⁴ sapaun=an kuni osor'un=an kuni : sapa 「頭」 un 「～にはまる」、osor 「尻」 un 「～にはまる」。

⁵⁵ hemuymuye=an : hemuymuye というのは、人間の場合、夜具を頭から引きかぶって寝ることで、何か心に倦むことがある場合の寝方である。ここでは、体に頭を突っ込んで丸くなる犬の寝方を、それになぞらえている。

⁵⁶ su noski punaspunas : punas が他にどのような場合に用いられるかわからないが、湯等が煮立つときの常套表現である。

⁵⁷ rurihi wano a=kemkem : rurihi は rur 「汁」の所属形で、その盛られたご馳走のうちの汁の部分、

enuki ciki	すると、
a=sampekesse kosituriri	肝の下端がのびのびし
a=sampepake kosituriri	肝の上端がのびのびした。
sawo: sawo: ae orowakayki	それから
numihi ne usi	実のところを
a=e ki ki wa	食べて
inu=an ⁵⁸ hike,	みたが
ip ⁵⁹ a=kor ona	私の父が
i=koypuni hi ta koraci	よそってくれた時とおなじく
pirka usi	よい部分
ne p ne kusu,	だったので
keraan humi	おいしくて
a=sampekesse	肝の下端が
kosituriri	のびのびし
a=sampepake	肝の上端が
kosituriri	のびのびした。
sawo: sawo: ae oro ta tapne	そこに
rewsi=an na.	逗留した。
sawo: sawo: ae nepenepo	なんとまあ
keraan w_a	おいしい
humas y_a ka	ことであるのか
a=eramuskari.	わからないほどである。

という意味。ここでわざわざ rurihi wano 「その汁から」と言っているのは、長い間飢餓状態におかれた者が急に固形物を口にするとショック死することがあるので、最初は液体状のものを飲ませ、それから徐々に固形物に移行するものかどうかを踏まえての表現と思われる。そう考えると、この6行前に rur turano 「汁とともに」入れたとわざわざ言っているのも、リピタラの村長がそのことをよくわかっていて、ご馳走を盛ったということを表しているのであろう。

⁵⁸ inu=an : 「～してみる」という言い方には、wa inkar と wa inu というふたつの形がある。inkar は「見る」であるので、日本語の「～してみる」と平行的な表現だが、inu は普通「聞く」と訳される。つまり、「～してきく」という表現になる。実際には、inu は視覚以外の感覚すべてについて、それを感受することを表す動詞であるので、視覚以外の感覚が関与するような試みに対しては、すべて wa inu が用いられる。ここでは、「味覚」が問題となっているので、a=e (ki ki) wa inu という表現になっているのである。ちなみに、inkar も inu も自動詞であることにも注意。

⁵⁹ ip : 韻文で人称接辞 a=の前のみに（しかも行頭のみに）現れる虚辞。一行の音節数を調節するために用いられるものと思われるが、白沢氏の場合、a=kor 「私の」、a=ne 「私が～である」、a=ki 「私がする」、a=ye 「私が言う」の場合のみ確認されている。なお、沙流方言や静内方言においても同様の形式が同じ機能で用いられることが確認されている。

sawo: sawo: ae tutko rerko	二三日
oro ta rewsu=an	そこに逗留した。
enuki awa	すると
pirka aep	おいしい食べ物を
a=i=konumke wa	私のために選んで
a=i=ere kuni p	食べさせてくれる
ne p ne kusu <su>	ものだから
sawo: sawo: ae teeta montum	普通の力が
a=yaykosanke	わいてきた。
keworot=an na	力がついてきた。
sawo: sawo: ae an=an awa	すると
sineantota	ある日
matne atuyta ⁶⁰	メス犬 20 匹
pinne atuyta	オス犬 20 匹
kor_nispa ne	持っている長者で (リピタラの村長は) あった
anan ⁶¹ w_a	のだが
sawo: sawo: ae ekimne kusu	狩に行こうと
cisoynaraye	外に出て
ekimneearpa ⁶²	山に行った。
sawo: sawo: ae enuki ciki	すると
sonno poka	本当に
"matne atuyta	「メス犬 20 匹
pinne atuyta	オス犬 20 匹
cucucu"	チュチュチュ
sekor itak ki ki kor	と言いながら
arpa p ne kusu	行くので
tan inne seta	大勢の犬が

⁶⁰ atuyta : 動詞を数える時だけに用いられる数詞だが、辞書によってその数が異なる。私の『千歳方言辞典』では「十頭」と記したが、実はこの部分の解説で白沢氏は「メンイヌ 20 に、オンイヌ 20」と言っている。辞典のほうの誤りである。

⁶¹ anan : 後からそうであったことに気づいたことを表す助動詞。ここでは、そんな長者とは知らずに逗留したのだが、実はたいそう裕福だったということを表している。

⁶² ekimneearpa : ekimne 「(狩等のために) 山に行く」 e- 「~のために」 arpa 「行く」。この e- は接続助詞の kusu と交代可能な充当接頭辞で、名詞ではなく自動詞を項としてとることが特徴である。

okot ki ki wa	その後をくつついて
ekimneearpa ⁶³ .	山に行く。
sawo: sawo: ae tapan pe kusu	そこで
puyar kari terke=an	私は窓から跳びだして
kese a=anpa	その後を追った。
arpa=an ayne	追っていくうちに
sawo: sawo: ae tan inne seta	(追い越して) 大勢の犬の
etoko a=ehoyupu wa	前を走って
inu=an ⁶⁴ ciki	みると
teeta montum	昔の力
teeta kewtum	昔の気分が
a=yaykosanke	わいてきた
u ki ki kotom	ように
anesanniyo	思えた。
sawo: sawo: ae arpa=an awa	走って行くと
iruka arpa=an kor	少し行くと
yaypuni puta	大きな鍋蓋で
a=esinnaye ⁶⁵	地面に筋をつけた
a pekor an	ような
poro kamuy	大きな熊が
arpa ru ko	歩いた跡が
maknatara.	はっきり見える。
sawo: sawo: ae tan ... tapan pe kusu	そこで
ru kurkasi	足跡の上を
anehopuni ⁶⁶	私は飛んで行った。

⁶³ ekimneearpa : 日本語の訳ではこの動詞の主語はどうしても犬たちに解されてしまうが、arpa は単数形なので、この主語はリピタラの村長と解釈される。

⁶⁴ a=ehoyupu wa inu=an : この wa inu も、体の中の感覚を問題にしているので、inkar ではなく inu のほうを用いている。

⁶⁵ yaypuni puta aysinnaye : 白沢氏によると、大きな足跡を指す言葉ではあるが、なぜこのように言うのかはわからないという。yaypuni は辞書によって、「人を見下す」「からかう」「真似る」など、色々な訳がつけられているが、語源的には yay- 「自分」 puni 「～を持ち上げる」ということであるだろう。a=esinnaye は a= 「人が」 e- 「～で」 sir 「地面」 naye 「～に筋をつける」。

⁶⁶ anehopuni : e- 「～で<場所>」 hopuni 「飛び立つ」で、an- は話の流れからも 4 人称の人称接辞であることが期待される。しかし、この方言では一般に他動詞 4 人称主格形は a= であり、an= は用

tan poro kamuy	その大きな熊の
kese a=anpa	後を追って
arpa=an awa	行くと
sawo: sawo: ae irukay ne kor	いくらもたたずに
a=osikoni na.	追いついた。
teeta montum	普通りの力を
a=yaykosanke.	出して
tan poro kamuy	その大きな熊の
okkewe a=kaye	首筋を折り
enuki hine	そうして
kotankonnispa	村長の
etoko a=omare	前に置いた。
enuki ki wa	そして
oyakke ta yayosura=an w_a	離れたところに寝転んで
an=an awa	いると
oro ta ek na.	そこに(村長が) やってきた。
sawo: sawo: ae "ene kusnamne" ⁶⁷	「これだから
Petetok un kur	ペテトクの
kotankonnispa	村長が
koasuruas pe	それでうわさになっている
kamuy ne a wa	カムイであったわけで、
sawo: sawo: ae irammakaka	立派なこと」
itak ki ki kor	(と) 言いながら
i=sam ta hoski	私のそばに先に
i=sam ta ek wa	私のそばに来て
i=koonkami	私に礼拝した。
sawo: sawo: ae orowakayki	それから
a=rayke poro kamuy	私が倒した大きな熊の
oro ta arpa	ところに行つて

いられない。ということから、かつて an=>aという変化が起こったが、一部の表現で an=のまま残ってしまったものが、常套句としてその形で使われているのだと解釈しておく。ただし、これが人称接辞であったことの名残として、この表現にさらに人称接辞がつくことはない。

⁶⁷ kusnamne : 『沙流方言辞典』に「...だから(?)」とある。

koonkami na.	礼拝した。
sawo: sawo: ae orowakayki	それから
yuk pannis ⁶⁸ wa	獲物の下半身のほうへ
terke kane	飛び跳ねて
yuk osor wa terke kane	獲物のお尻のほうに跳ね
yuk sapa wa terke kane	獲物の頭のほうに跳ねて
iri ki ki na	解体した。
sawo: sawo: ae enuki ki wa	そして
okere ciki	それが終わると
"kam rura patek ...	「肉を運ぶことばかり...
kam rura patek	肉を運んでばかり
a=ki ki ki na ⁶⁹ ."	いることよ」
itak ki ki kor ...	(と) 言いながら
nea ... kamuy kam	熊の肉を
se ki ki wa	せおって
sap=an ki na.	山を下りた。
sawo: sawo: ae a=uni ta ... uni ta sap=an	(村長の) 家まで下りた。
enuki awa	すると
tap orowano	それから
pirka usi	おいしいところを
suwe ki ki na.	煮てくれた。
sawo: sawo: ae "poronno e=esinki p ne na.	「たいへんお疲れでしょうから
poronno e=e kusu ne na."	たらふく食べてくださいな」
itak ki ki kor	(と) 言いながら
i=koonkami	私に礼拝し
sawo: sawo: ae i=koypuni na.	お膳をささげてくれた。
orowa kayki	そこで
hopuni=an w_a	起き上がって

⁶⁸ yuk pannis : pannis については『久保寺辞典稿』に「尻の方,下部,下体(胴や腹以下)(pen-nishの対)」とある。対句にするつもりであれば、この後 yuk pennis wa terke kane と続きそうなところだが、おそらく表現を切り替えて yuk osor wa...としたのだと考えられる。なお、yuk はこの場合「鹿」ととるべきではなく、より一般的な「獲物」という意味で使っているのだと考えたほうがよかろう。

⁶⁹ kam rura patek a=ki ki ki na : 「肉を運んでばかりいる」というのは、言うまでもなく、この犬が熊を獲ってくれるおかげで、楽な仕事だけしていればよいという感謝の言葉である。

a=e ki ki wa	それを食べて
inu=an hike	みると
a=kor a=onaha ⁷⁰	私の父親が
i=koypuni ⁷¹ katu	よそってくれた
koraci kane	ように
pirka usi	おいしいところを
i=kopuni ⁷² kuni p	盛ってくれたもの
ne p ne kusu	だから
keraan w_a	おいしくて
a=e a a=e a	食べて、食べて
sawo: sawo: ae otu suy re suy	何度も何度も
ekimne a=tura	狩に連れて行った
enuki ki na	のだ。
okay=an awa	そうして暮らしていると
sawo: sawo: ae sineanpeta	ある日のこと
seta mik haw wen ruy	激しく犬の吠える声がある。
enuki awa	すると
uymam kusu	交易に
arpa a=onaha	行った私の父が
ponehe...kapuhu koowkaowka	骨・・・(痩せこけて) 皮がたるんで皺だらけになった
enuki ki wa	そういう姿で
san ki ki na.	山を下りてきた。
sawo: sawo: ae i=koyaykarap hawe	私に挨拶の言葉を
kari kane	繰り返しながら
hosipi=an ipe ⁷³	私が家に戻るためのご馳走

⁷⁰ a=kor a=onaha : kor を用いた所有表現の後に人称接辞+所属形が来る、このような形式は、白沢氏のテキスト中によく見られるばかりでなく、沙流方言でも確認できる。ただし、親族名称に限られているようである。

⁷¹ i=koypuni : 次の例を参照。

⁷² i=kopuni : 前例では i=koypuni となっているが、ここでは i=kopuni となっているのは、目的語である pirka usi が入っているかないかの違い。すなわち i=koypuni のほうは目的語の名詞句にあたるものとして、不定接辞の i が入っている。こういう細かいところはうっかりすると聞き逃しがちだが、文法的に非常に厳格に守られている部分なので注意が必要。

⁷³ hosipi=an ipe : 直訳すれば「私が戻る食事」。白沢氏の説明によると「帰ってくれっていうお祝い」ということで、犬を迎えるために持ってきた手土産ということ。hosipi=an と ipe の間には統語的な

san... hosipi=an ipe	家に戻るためのご馳走を
sinna kane	別に
i=sam omare	私の傍らに置き
sawo: sawo: ae orowa	それから
Ripitar un kur	リピタラの
kotankonnispa	村長に
i=eham ipe	私の面倒を見てくれたお礼の食べ物を
sinna sama omare	また別に脇に置いた。
sawo: sawo: ae orowakayki	それから
itak ki hawe	言った言葉は
ene oka hi.	次のようなものだった。
"sisam kotan ta	「和人の村に
tono kotan ta	殿様の村に
arpa=an ki wa	私は行って
<wa> a=oarpa	私は行った。
sapaha ta paskur_rok	頭にカラスがとまった
a pekor okay ⁷⁴ sisam	かのような和人が
poronno ran w_a	大勢下りてきて
i=cipkoetaye ⁷⁵	私を舟ごと引き上げ
enuki ki wa	そして
a=kor wa arpa=an	私の持って行った
cihoki ne yakka	毛皮も
a=tekehe kere	私の手が触れも
humi ka isam no ⁷⁶	しないで
yapte wa	岸に上げて
yan=an w_a inkar=an awa	私も上がってみると
tanepo a=ki p uymam ne kusu ⁷⁷	初めての交易であるので

関係が成立せず、通常の連体修飾構造とは異なっていることに注意。

⁷⁴ sapaha ta paskur_rok a pekor okay : 和人の常套的な形容。言うまでもなく「ちょんまげ」のことを指している。

⁷⁵ i=cipkoetaye : i=「私を」 cip「舟」 ko-「～とともに」 etaye「引っ張る」

⁷⁶ a=tekehe kere humi ka isam no : 和人たちが奪って行ったということではなく、非常に丁重に扱われたということ表現している。

⁷⁷ tanepo a=ki p uymam ne kusu : 何回も交易に来ている人たちは、それぞれ得意先というものが

a=eramuskari	見知らぬ
tono oro ta	殿様のところに
i=tura ki wa	連れて行かれて
ahun=an ciki	家の中に入ると
sawo: sawo: ae 'tanepo tapne' ⁷⁸	初めてこのように
poronno uymam kusu	大勢、交易のために
arki utar arki korka	やってくる人々がいるというのに
i=or_ ta yan kur	私のところに来る人は
sinep ka isam	ひとりもない。
enuki awa	すると
ottena kamuy ⁷⁹	オッテナ殿が
sawo: sawo: ae ney'un suy an=an katu	どこからか私がいることを
eramuan kusu i=or_ ta	知って、私のところに
yan ruwe an. '	来てくれたのだなあ」
itak ki ki kor	(と) 言いながら
'hokure yan hokure yan' sekor	「さあ上がりなさい、さあ上がりなさい」と
hawean kor a=tekehe ninpa.	言いながら、私の手を引いた。
oro ta an CASIKI or un	そこの、座敷の中へ
i=tekeninpa	私の手を引いた。
enuki ki wa	そして
orowano	それから
usa aepi ⁸⁰	色々な料理
tono ku aep ... tono ku sake	殿様の飲む料理・・・殿様の飲む酒
tono ... tono e aep	殿・・・殿様の食べる料理を

あつて、そこに行くことになるのだが、このペテトクの村長は初めてなので、行くところが決まっていなかったということ。松前藩下の商場知行制や場所請負制において、交易相手のはっきり割り当てられているというのとは少し違う状況。これを歴史的な観点からどう解釈するかは議論の余地がある。

⁷⁸ tanepo tapne : 意味的に後の文章とつながっていない。

⁷⁹ ottena kamuy : ottena は和人がアイヌ人に対して与えた役職名である「乙名」がアイヌ語に入ったものだと考えられるが、アイヌ語のテキスト中では和人がアイヌの成人男子一般を指す呼称として用いられ、役職という意味合いはないことが多い。ここの用法もその一例である。これも和人側の歴史的資料とアイヌ語の伝承とで食い違う点である。

⁸⁰ usa aepi : aepi は aep の所属形。usa 「色々な」の後では普段所属形にならないような名詞も含めて所属形になるが、その理由は不明である。

i=kopunpa na.	私に出してくれた。
sawo: sawo: ae 'e=kor wa e=ek cihoki	「お前の持って来てくれた毛皮の
nepenepo	なんと
pirka ruwe	立派な
ene an katu'	ことよ」(と)
itak ki ki kor	言いながら
sawo: sawo: ae usa aepi	色々な料理を
i=samesikte	私の前に並べた。
enuki ki wa	そして
sisam kotan ta	和人の村に
tono kotan ta	殿様の村に
paye kur anak	行った者は
tono ye itak	殿様の言う言葉を
somo ... somo nu ki kor	聞かないと
a=ronnu p ne sekor	殺されてしまうと
hawas hawe	いう話を
a=nu p ne kusu	聞いていたので
sawo: sawo: ae itak os itak tura	言葉の後、言葉とともに
itak os itak etok	言葉の後、言葉の先に
a=chenpenpenu ⁸¹ ...	私はうんうんとうなづいた。
(中断)	
kunne hene	夜も
tokap hene	昼も
sawo: sawo: ae a=i=kopuy... a=i=... ⁸²	
pirka ipe a=i=kopuni wa	おいしいご馳走を私に出してくれ
a=e ki korka	食べているのだが
a=resu kamuy	私の養うカムイ
a=resu pito	私の養う神様のことが
a=epotara wa	心配で
sawo: sawo: ae i=kure korka	酒を飲まされても

⁸¹ itak os itak etok a=ehenpenpenu : 日本語もよくわからないものだから、殿様が何か言うたびに、うんうんとうなづいて、さからわないようにしたということ。

⁸² この部分は不明。次の行で言い直したのではないかという判断で、このように表記してみた。

iku=an ... iku=an korka	酒を飲んでも
ihoski=an humi ka	酔った感じも
oarar isam.	まったくしない。
sawo: sawo: ae hetak ta	一刻も早く
inan to or_ ta	いつでも
hosipi=an ⁸³ y_ akka pirka	戻っていいぞ
sekor kamuy tono	と、殿様が
hawean ruwe an. sekor	言ってくれまいかと
yaynu=an patek	思っただけ
a=ki ki ki kor	いながら
a=tere ki wa	待って
an=an ki na	いたのだ。(そして、やっと)
sawo: sawo: ae usa amami	穀物だの
usa aepi	食料だの
poronno cip or a=esikte	たくさん、舟いっぱい積んで
enuki ki wa	そして
hosipi=an w_ a	戻ってきて
yan=an ki h_ ine	海から上がって
ki wa inkar=an awa	みると
a=resu pito	私の養う神
a=resu kamuy	私の養うカムイは
oarar isam.	どこにもいない。
tapan pe kusu	そこで
sawo: sawo: ae 'neun a=resu kamuy iki ruwe	『私の養うカムイはどうした
ne ya? arpa ruwe ne ya?'	のだ? どこへ行ったのだ?』
sekor itak=an awa	と言うと
a=antemaci	私の妻は
sawo: sawo: ae 'pirka aep	『おいしいご馳走を
a=kopuni ki wa	捧げて

⁸³ hosipi=an : inan to or ta hosipi=an yakka pirka が sekor で示される引用文の中身だとすると、hosipi=an の主語は hawean の主語である kamuy tono ということになってしまうが、文脈から見てこの主語はペテトクの村長であることは明らかである。すなわち、この文は直接話法の形式をとりながら、実質的には間接話法となっていることになる。

poronno a=ipere	たくさん食べさせて
enuki ki kor	いたと
an=an ki awa	いうのに
sineantota	ある日
sawo: sawo: ae puyar kari terke	窓から飛び出した
enu ki awa	つきり
hosipi siri	戻ってくる様子が
oar isam na.'	全然ありません』
sawo: sawo: ae itak ki ki wa	(と) 言うので
a=ruska kusu	私は腹が立ったので
sawo: sawo: ae a=resu kamuy oarpa usi ka	養うカムイがどこへ行ったのか
a=erampewtek no	わからないまま
siknu=an w_a an=an hike	生きていたところで
sawo: sawo: ae nep rakaha ne nankor y_a	なんの甲斐があろうか
yaynu=an kusu	(と) 思ったので
somo ipe=an no	何も食わずに
tane ta pakno	今まで
ray=an kuni a=ramu kusu	死のうと思ったので
somo ipe no an=an kor	何もたべずにいると
a=macihi pirka aep rapte wa	妻はおいしいご馳走を下ろしてきて
suwe a suwe wa ... a wa	それを煮ては
orowaun esirosi no an w_a	後ろ向きになって
e a e a	がつがつと食べている。
sawo: sawo: ae enuki ki kor	そうして
an ki awa	いたところ
sawo: sawo: ae sine ancikar _ ta	ある晩
wentarap=an ⁸⁴ humi	夢にみたのは
ene an kuni	このようなこと。
sawo: sawo: ae 'e=macihi horkew kamuy ⁸⁵	『お前の妻が狼のカムイに

⁸⁴ wentarap=an : 夢はカムイが人間に交信するためのひとつの手段だが、この場合夢を見せたのは誰かと問うたところ、「今世話になっている horkew が親に夢見せた」という答えであった。そういう場合、あらかじめ、犬が叙述している箇所でのそのような夢を人間の父親に見せたという描写が入ることも多いのだが、ここでは省かれている。註 86 参照。

korewen w_a	つらくあたって
somo ipere	食事もさせずに
enuki ki wa	いて
kap takupi	皮だけになり
pone takupi	骨ばかりの
koowkaowka	しわしわになり
enuki ki wa	そして
sawo: sawo: ae cise or_ ta e=ray wa ne yak	『家で死んだら
e=wenunu	お前の悪い母親が
cikoehe	ほっと安堵の息を
e=ekarkar_ na.	吐くだろう』
yaynu kusu	(と) 思ったので
puyar kari terke	窓から飛び出
enuki ki wa,	して
pet pet...	川、川
pet pes ikesuy ki wa	川伝いに下って逃げて
san ki ki wa	山を下りてきて
Icanor un kur	イチャノロの
kotankonnispa	村長
or wa a=eham korka	から (とどまってくれと) 頼まれたが
<ka> hankeno e=an h_ike	『近くにいても
nep rakaha	いいことが
ne nankor y_a?	あるだろうか?』
yaynu kusu	(と) 思ったので
Icanor un kur	イチャノロの人の
ye a itak	言う言葉には
kasi ki ki wa	耳をかさずに
san ki ki wa	下りてきて
Ripitar un kur	リピタラの
kotankonnispa	村長の

⁸⁵ horkew kamuy : ここに来て初めて、主人公であったイヌのカムイが、実は狼であることが明らかにされる。

ye a itak	言った言葉に
nu ki ki wa	したがって
oro ta an na.	そこにいるのだから
sawo: sawo: ae e=tak kus ne na ⁸⁶ .	迎えに行きなさい」
sekor wentarap=an	という夢を見た。
tapanpe kusu	そこで
hopuni=an w_a	起き上がって
a=sittokkuri a=kemakurihi	ひじの影、足の影
a=kokkakuri utasa korka	ひざの影が交差 (するほど弱って) いたが
a=wen-macihi kimuy otopi	悪い妻の頭髪を
a=tekkonoye	手に巻きつけ
ranke corka ⁸⁷	床を
a=konumke kane	選んで
a=esirkik humi	叩きつける音を
rimnatara	どしんどしん
rikun corka	梁に
a=ekikkik humi	叩きつける音を
taknatara	ゴツンゴツンと
enuki ki kor	させながら
a=kikkik ayne,	叩き続けているうちに

<以下散文>

'a=ki hi wen pe, a=korewen pe ne kusu	『私が悪いことをして、つらくあたっての
ray etok ta a=ye hawe ne na.'	死ぬ前にお話しておきます』
sekor hawean kor, <kor>	と言いながら
resu kamuy somo ipere no	養うカムイに食事もさせず
pirka aep sinen ne patek e katuhu ...	おいしいものをひとりで食べていたことを
uuspare ⁸⁸ wa kusu,	白状したので

⁸⁶ この夢の中のせりふ中において、狼のカムイはあくまで3人称におかれている。それからすると、夢を見せたのは、もともとは狼のカムイ自身ではなく、別のカムイ—例えばこの狼のカムイの親であったという可能性もある。

⁸⁷ ranke corka~rikun corka : corka の本来の意味についてはわからないが、「(ranke) corka っていうのはじべたぶつけて、rikun corka っていうえば上の木さぶつけてっていう話」という白沢氏の説明から、本文のような訳をつけている。形の上では「~の下」を表す corpok と対になるような形をしている。

a=oanrayke hine kotan kes un a=ninpa wa
 a=osura wa orowa,
 a=kor kamuy a=resu kamuy
 a=tak kusu san=an ruwe ne na."
 sekor hawean kor i=tak kusu san ruwe ne.

<以下韻文>

sawo: sawo: ae tapan pe kusu

hosipi=an ipe

i=sam omare

a=i=eham ipehe

kotankonnispa

sama omare

sawo: sawo: ae orowa isimne hosipi kusu

soyne ki na.

tapan pe kusu

puyar kari terke=an

kese a=anpa

sawo: sawo: ae a=tura ki ki wa

a=un cise ta⁸⁹

hosipi=an na.

sawo: sawo: ae ip a=kor ona

i=kemnu kuni p

ne p ne kusu

tane ta pakno akkari

pirka aep i=konumke wa

i=ere ki na.

sawo: sawo: ae orowakayki

a=tura ki ki wa

息の根をとめて、村の下はずれに引きずって行って
 そこに捨てた。そして
 私のカムイ、我が育てのカムイを
 迎えに行くために山を下りたのだ」
 と言いながら、私を迎えに山を下りてきた。

というわけで

迎えの食事を

私の傍らに置き

私が世話になったお礼の食事を

村長の

脇に置いた。

そして、翌日村に戻るために

外に出た。

そこで

私は窓から跳びだして

あとを追って

一緒に行き

我が家に

戻ったのだ。

私の父は

私を気の毒がった

ものだから

今まで以上に

おいしいものを選んで

私に食べさせてくれた。

そして

一緒に

⁸⁸ uuspare : 『沙流方言辞典』によると「(直訳すると)(二人以上/二つ以上のこと)を伝える、(人)のことを『あることないこと言う』」

⁸⁹ a=un cise ta : cise は通常文法的に場所としては扱われないので、「家に」というときは cise or ta となるのだが、韻文中でよく使われる un cise という形式では ta が直後におかれる。大澤香氏が沙流方言についてこのことを指摘しているが、『アイヌ語沙流方言における名詞 cise の考察』2005年度 東京大学文学部卒業論文) 千歳方言でも同様のことが言える。

ekimne=an kor	山へ狩に行く
teeta koraci	以前と同じように
rupne kamuy	大きな熊
ikiyakkayki	であっても
sawo: sawo: ae okkewe a=kekke	首を折り
etoko a=omare	彼の前に置いた。
enuki ki kor	そうすると
kamuy koonkami kuni	熊に礼拝する
etokoho ta	前に
i=koonkami	私に礼拝する。
sawo: sawo: ae enuki ki wa	そのようにして
pirka i=resu	私は大事に養われ
pirka i=kor	大事にあづかられて
ki ki ki na	いた。
sawo: sawo: ae kor oka=an ...	そのように暮らしていた。

<以下散文>

ruwe ne kusu	であるので
horkew kamuy a=ne wa,	私は狼のカムイで
eytasa kspa nispa kamuy ⁹⁰ puri pirka wa	(ペテトク) 長者がとても行いが良くて
a=koonrupus kusu, a=koponpene ⁹¹ kusu	気に入ったので、私はその子供になるために
unihi ekopas a=an w_a an=an.	彼の家によりかかって座っていた。
inehempak to ki katu erampokiwen kusu	何日もそうしている様子を彼が哀れに思って
KONDO i=ipere wa i=reska.	私に食事を与えて養った。
orowano a=pirkare kor an=an	そこで私は彼を裕福にしてやっていた
kamuy a=ne a korka,	私はカムイであったが
a=unuhu wen w_a kusu ...	母親は悪い人だったので
a=unuhu wen w_a kusu	母親は悪い人だったので

⁹⁰ nispa kamuy : ペテトクの長者はもちろん人間であってカムイではない。しかし、このように人間に対しても、敬意を表す表現として kamuy という語を使い得る。これは kamuy の多義性の問題であって、aynu 「人間」と kamuy の間に境界がないということではない。

⁹¹ a=koponpene : ko- 「～に対して」 ponpe 「小さいもの=子供」 ne 「～になる」

orowa a=unuhu ka a=rayke wa isam pe
a=ne ruwe ne kor,
horkew kamuy poho a=ne korka, <ka>
aynu kewtum a=ramuosma wa kusu
a=koponpene wa orowa,
katkemat ka a=rayke wa isam ruwe ne korka,
tapne an pe
aresikup or_ ta a=kopepka
hokew kamuy a=ne wa
onne p a=ne ruwe ne na TTE

母親は殺されてしまった。
私はそういうものであり
私は狼のカムイの息子であるが
人間の心が気に入ったので
その子供となって
夫人は殺されてしまったが
そういうことで
生きているあいだに大変苦労した
狼のカムイで私はあり
年老いたのであった。って。

(なかがわ ひろし・千葉大学人文社会科学研究科)